

2017/4/22

(日々雑感 85) 末尾追加版



どえらいことに気づきました。

「老人」ではなく「老斗」だった。

他のお客さんの紹興酒（シャオシンチュウ）のボトルには、みんな、本人が書いたのか俊麗がかいたのかは分かりませんが、必ずお客さん個人の名前が書いてあるのに、僕自身が書かないこともあって俊麗が書くのですが、何故かいつも「老人（ラオレン）」と書くので、つい先だって

「なあ、俊麗、何度言っても俺は「ラオレン」だな。なんでや？そんなにじいさんか？わし？」

と訊くと、

「ラオレンない。ラオトォ」

と言って、よくボトルに書いた文字を見ろとでも言うように、その文字を指しました。確かに見ると「老人」ではなく、老人の「人」の文字の左刎ね（はね）の横に点々が付いていません。

「ラオトォ。私の中国のお父さん「ラオトォ」お父さん中国で警官。でラオトォ」

と意味不明のことを言います。

中国では老人の事を、本当は「老」と「人」の横に点々とつけたのが正式の書き方で「ラオトォ」と読むのだろうと解釈しました。

「なあんや。やっぱりわしはじいさんかいな。ま、ええわ。任せるわ」

「違う違う。でも、わかんない。日本語、何て言ったら良いかわかんない。私のおとうさんラオトォ」

俊麗はまた、先ほどと同じ事を言って「ま、いいかあ」と言う顔つきで少し笑いました。

それから、部屋に帰って寝ましたが、起きたときにその時のことが思い出され、ちょっと試

しにネットで調べてみるか？と思い立ち、ググってみました。

それで、びっくりしたのです。

「ラオトォ」と聞こえたので「ト」の字に一斗樽、二斗樽の「斗」の字を充てて見るか？と思いつきました。と言うのも「人」の字の横にある点々が、そう言えば「斗」の字に見え、音も「と」だったからです。

その結果、weblio の中日辞典の検索で引いた訳語が

「老斗」(lao dou) 意味は「いつも闘っている」だったのです。

「えーっ、なにこれ？」

それでびっくりしたのです。俊麗が中国で警官をしていたお父さんは「老斗」だと思っていたのは、じいさんだと言っていたのではなくて、お父さんは「いつも闘っている人」だったと言っていたのです。

それを僕のボトルに俊麗が書いて居た。

明け方の PC の画面にその訳語が映し出されたのを見たとき、胸がぐーっとなりました。なんとも言えずぐーっ。

その時僕は、「中国の謎のおんなスパイ」俊麗が、自分にとってとても大切な人なのだと分かりました。正直、泣きたくもなりました。

と、同時に限りなく辛くもなりました。

なぜなら俊麗は、鄧小平さんの奥さんだったからです。

それで、しばらくしてから思い直しました。

「おれは、俊麗の日本のお父さん。日本の老斗お父さん。其れでいいじゃないか。それで行こう。我、それで良しトス。以上！！」

そういつて、6畳1Kの部屋の窓を開け、バカみたいに警官だった中国の老斗父さんのまねをして、庭に向かって挙手の敬礼をしました。

敬礼をしながら手がおろせなくなり、直立不動の姿勢のまま、後から後から涙が出てとまらなくなり、おいおい泣いてしまいました。

そうして、おいおい泣きながらも、こころの中で「老人」が「老斗」であることに気がついたことを黙っていようと強く思いました。

注) 相変わらず、実験フィクションです。